イスラームにおける障害の表現

小村優太

はじめに：本稿の射程

本稿では、イスラーム[1]における障害の表現を取り扱う。このテーマを取り扱う場合、本来ならばイスラームという宗教が生誕した610年ころ[2]から現代にいたるまでの表現の変遷などを視野に入れることが理想とは思われるが、紙幅の問題や、なにより私自身の能力の限界もあり、本稿では三つの題材を取り上げることにする。ひとつ目はイスラームの聖典である『コーラン』、二つ目はムハンマドの言行録である『ハディース』、三つ目は文学作品である『千夜一夜物語』である。それぞれの文献における障害の取り扱われ方を紹介するのが中心になる[3]。また、イスラームに詳しくない読者の便も考え、それぞれの文献にかんする解説も丁寧に行うことにした。

1．『コーラン』における障害の表現

最初に取り上げるのは、イスラームの聖典『コーラン』である。『コーラン』はイスラームという宗教の聖典であり、ムハンマドが神から受けた啓示を基にした書物である（全114章）[4]。勘違いしてはならないのが、この『コーラン』には作者や著者といったものは存在しないということである。著者はムハンマドでないのである。たとえば新約聖書の福音書にはマルコやルカといった者の名前が冠されており、それぞれの福音書記者がその福音書を書いたとされているが、『コーラン』の場合はそれとまったく違っている。また旧約聖書に含まれる多くの書物も、その作者が不詳である。『創世記』は複数の資料が合成されて成立されたのだとも言われているが、そもそも成立が古すぎて正確な成立年代や著者を示すことは不可能である。ただ『コーラン』はこの場合とも異なっている。

現存する『コーラン』は第三代カリフのウスマーンがまとめたものであり、ウスマーン版などと称されることもあるが、このウスマーン版が制定される際に、異読や外伝といったものはすべて破棄されてしまったので、普通『コーラン』に異読の類は存在せず、旧約聖書や新約聖書のテキスト確定に付きまとう諸々の問題とは無縁である[5]。610年にムハンマドがヒラー山にて天使ガブリエルを通じ

石原孝二・稲原美苗編『共生のための障害の哲学—身体・語り・共同性をめぐって—』
UTCP Uehiro Booklet, No. 2, 2013 年 10 月，pp. 73–87.

て神の啓示を受けてから632年に亡くなるまでのおよそ22年間の啓示をまとめたものが、第三代カリフであるウスマーンの治世、650年ころに現行の『コーラン』として成立したのであり、編集経路はきわめて明白である。それではなぜ『コーラン』には作者がいないとされるのであろうか。

なぜなら、ムハンマドはあくまで啓示を受けただけであり、『コーラン』を書いたわけではないからである。つまり、強いて言えば作者は神ということになる。また「書く」といっても、ムハンマド自身は文盲であったとされたため、彼の受け取った啓示はすべて口頭で信者たちに伝えられたのである。当時のアラブ人たちは口頭伝承を重視しており、このように啓示をすべて口伝し、記憶しておくというのは、普通のことであった。そのため、『コーラン』が文章としてまとめられた後も、『コーラン』を暗記するとこはムスリムのあいだで熱心におこなわれ、『コーラン』を暗記している者は「ハーフィズ（記憶している者）」という称号で呼ばれていた[(6)]。

以上のように口伝と暗記で信者たちによって保持されていた『コーラン』であるが、そこにある問題が生じた。初期イスラーム共同体は周辺の非イスラーム諸国とのあいだで数多くの戦争をおこなうが、このような相次ぐ戦乱により、ムハンマドから直接啓示を聞いて『コーラン』を暗記していたハーフィズたちが数多く戦死してしまったのである。それに伴い、聖典を直接暗記している者たちが減少してしまうという問題に直面したイスラーム共同体は、それまで口伝で保持されてきた『コーラン』を文字化する必要に迫られたのである。このような経緯により『コーラン』はアラビア語で書き記されることになり、現在我々の手許にある『コーラン』の形になったのである。

『コーラン』は預言者ムハンマドに神が直接与えたものであり、それがアラビア語という言語を通しておこなわれたということから、『コーラン』を外国語に翻訳することは基本的に許されていない。そのため、公式には『コーラン』の翻訳は存在しない。無論世界中で『コーラン』の翻訳は作られているが、それらはみな「『コーラン』の解説書」という扱いなのである。よって本稿における『コーラン』の文章も、建前上はすべて『コーラン』本文の日本語による解説ということになる。

さて『コーラン』に登場する障害の表現は、以下のようになっている (Bazna, & Hatab, 2005)。

目が見えないことにかんする表現（a‘mā）	32回
耳が聞こえないことにかんする表現（abkam）	14回

口がきけないことにかんする表現（aṣamm）	６回
足が不自由なことにかんする表現（a‘raj）	２回
虚弱であることにかんする表現（ḍa‘īf）	22回
孤児であることにかんする表現[7]（muyattam）	20回
貧困であることにかんする表現[8]（miskīn, fakīr）	19回（miskīn）、５回（fakīr）
放浪者であることにかんする表現（ibn al-sabīl）	８回

ただし、『コーラン』で使用されているこれらの言葉は比喩的に使用されている場合も多く、「神の声にたいして耳をふさいでいた」や「神の印を見ることが出来なかった」など、必ずしもすべての例が現実の障害を指し示しているわけではないという点には注意しなければならない。本稿ではこれらのなかから、とくに二つの箇所を見てみることにしよう。

１－１．第48章「勝利の章」

まずは第48章「勝利の章」を見てみることにしよう。この章はいわゆる「聖戦」と、それにたいする信徒の義務について述べられている。そこでは信仰を偽って述べた者たちや、偶像崇拝者たちにたいする聖戦の義務が語られており、信徒はみなこれに参加しなければならない。そのため、この聖戦のつとめを果たさない者は厳しく批判される。彼らは自らの財産や家族のことばかりを考え、聖戦に参加しないくせに、勝利が確定して戦利品が手に入るとわかったらいそいそとやってきて、ぜひ仲間に入れてくださいと言う (『コーラン』48: 15)。『コーラン』はこのような者たちを厳しく批判している。実際にムハンマドは敵対者たちに何度も襲撃されており、初期イスラーム共同体の歴史は敵対者との戦争の歴史と言っても過言ではないだろう。ムハンマド自身は都市を拠点とする商人であったが、当時のアラビア半島はベドウィンなどの部族社会が中心で、殺されたら殺し返す血の復讐が横行しており、イスラームの教えが彼らベドウィンに普遍的な規律を与えたとされる。しかしムハンマド存命時のアラビア半島はいまだ部族社会的な血の掟が支配する世界であった。そのため、戦える者は誰であれ、戦争に参加して共同体を守ることが求められたのである。しかし、そうしたなかにも戦争への参加が免除される者たちが存在していた。それが身体的に障害を持つ者たちである。『コーラン』第48章の17節は以下のように述べている。

しかし盲目な者たちに罪はない。足の不自由な者たちに罪はない。病人たちに罪はない。神とその使徒につき従う者は誰でも、その下に川が流れる楽園に入るだろう。しかし背き去る者は誰でも、苦痛に満ちた劫罰を受けるだろう。(『コ

ーラン』48: 17)

『コーラン』における義務の免除規定についてはラマダーン[9]、いわゆる断食が有名であるが、これは外国に行っている者、旅行中の者、妊娠中の者、病人、高齢者、幼児など、状況的に断食を行うのが難しい者たちには免除されている。それと同様に、目が見えない、足が不自由である、病気であるなど、戦闘行為への参加に困難があると思われる者たちには、共同体への義務である聖戦への参加が免除されているのである。

１－２．第24章「御光の章」

もうひとつは、第24章「御光の章」である。これは『コーラン』全体のなかでも有名な章のひとつであり、神秘主義者や哲学者たちはこぞって『コーラン』のこの章を引用し、そこに神秘的な内容や哲学的知恵の真相を読み込もうとした。しかし今回見てみるのはそれとは違う部分であり、そこでは信徒の義務が述べられている。その部分は、右手の所有する者――これは『コーラン』に独特の表現で、女奴隷のことを意味する――と家族のうちで未成年の女性でも、早朝の礼拝のとき、日中の暑さのために衣服を脱いでいるとき、そして夜の礼拝のとき、こういった者たちが居間に入るときには許可を求めさせるようにと言っている。また自分の子供であっても成人した者は、入室時に許可を得るようにしなければならず、反対に、もはや子供を産むことのない女性は、華美なものでなければヴェールをかぶらなくてもいいと述べられている。このように入室時の取り決めなどが述べられた後、障害者のことが言及される。

> しかし盲目な者たちに罪はない。足の不自由な者たちに罪はない。病人たちに罪はない。またあなたたち自身も、あなたたちの家で食べても、あなたたちの父方の者たちの家で食べても、母方の者たちの家で食べても、兄弟の家で食べても、姉妹の家で食べても、父方のおじの家でも、父方のおばの家でも、母方のおじの家でも、母方のおばの家でも、あなたたちが鍵をもっている家でも、友達の家でも食べて良い。またあなたたちは集まって食べても、ばらばらで食べても咎められることはない。ただあなたたちが家に入るときには、神に祝福された良き挨拶の言葉で彼らに挨拶するように。このようにして神はあなたたちに徴を明らかにしてくださったのだ。きっとあなたたちは知ることになるだろう。(『コーラン』24: 61)

引用文冒頭の「盲目な者たちに罪はない。足の不自由な者たちに罪はない。病人たちに罪はない」という表現は、先述「勝利の章」とまったく同じである。こ

れは、障害を持つ者に言及する際の、ある種の定型句であると考えられる。但し、それぞれの文言が使用されている文脈が異なっているため、それらが文章のなかではたしている役割はお互いに異なっている。この箇所の意図は、障害者を食卓から締め出してしまう迷信の禁止だと言われている[10]。食事は誰の家で食べてもいいし、誰と一緒に食べなくてもいい。ここではおじやおばといった親類関係の記述が詳細にされているが、これは当時の血縁関係が濃密な部族的社会を反映しているのであろう。

ここで見てきた二つの例は、文言としてはまったく同じであるが、それぞれが指しているものはまったく違っている。「勝利の章」は、身体的に障害を負った者にたいする社会的責務の免除について述べている。彼らには共同体の成員に課せられる義務が免除されるが、それは罪ではなく、なんら責められるものではない。また「御光の章」では、障害者を共同体の枠内から排除してしまうことが禁止されている。信徒は誰であっても好きな場所で食事をすることが出来るのであり、障害者がどこで食事をしようと、ほかの信者たちはそれを咎める権利はない。言い換えるならば、「勝利の章」は障害者にたいする免除規定を、「御光の章」は障害者の人権にたいする保障を述べているのである[11]。

2．『ハディース』における障害の表現

次はムハンマドの言行録である『ハディース』を見てみることにしよう[12]。これはイスラームの預言者ムハンマドの言葉を集めたものであり、神からの啓示をまとめた『コーラン』とは違い、生身の人間としてのムハンマドの言葉がもとになっている。とはいえ、こちらもイスラームにおいてはきわめて重要で、ほとんどの宗派では『コーラン』に次いで重要なものと見なされている。イスラームにおいては、共同体内部のものごとを決定するための根拠、法源（ウスール）が四つ決められているが、そのうちの二つ目、慣習（スンナ）を決定するものとして『ハディース』が存在しているため、イスラームにおいては『コーラン』に次ぐものとしての重要性を持っている[13]。

なぜ『ハディース』が残っているかというと、『コーラン』の内容だけでは、ムハンマド存命中ですらイスラーム共同体で起こるすべての出来事に対応することが出来なかったからである。それは『コーラン』では触れられていない話題のこともあれば、『コーラン』では触れられているが解釈が困難であるといった場合のときもある。そのような時、ムハンマド存命中であれば、直接ムハンマドに尋ねることが出来るのだから、信徒たちはムハンマドにさまざまなことを聞く。よって『ハディース』と呼ばれるものはきわめて厖大な量になる。632年のムハンマド没後は、もうムハンマドに直接質問することが不可能になるが、残された

『ハディース』は大量にあるので、信徒たちはまず『コーラン』、そして『ハディース』の内容を吟味して共同体の規範を作り上げていったのである。

またこの『ハディース』は、ムハンマドの言行録を伝承したものであるという性格上、伝承の経路、そして信頼性が重要な判断要素になっている。つまり、いくら素晴らしい言葉が伝えられていたとしても、信頼に足る人物を介してのものでなければねつ造の可能性があるということである。そのため『ハディース』のそれぞれの言葉にはマトンと呼ばれる本文の前に、必ずイスナードと呼ばれる伝承経路が書かれている。『ハディース』においてはこのイスナードがきわめて重要なので、イスナードの経路のなかに疑わしい人物が混ざっていると、その本文の信頼性も低下するのである。

さて『ハディース』における障害の表現であるが、これは『コーラン』よりも具体的な話になる。たとえば、次のような話が伝わっている。

> アブー・フライラが伝えるところによると[14]：預言者（彼の上に平安があらんことを）のもとへ盲目の男がやってきて「神の使徒よ、誰も私をモスクへと連れて行ってくれません」と言った。そこで彼は神の使徒（彼の上に平安があらんことを）に、彼の家で礼拝することの許可を求めたのだ。［神の使徒は］それを許可した。それから［その男が立ち去ろうと］振り返ると、［神の使徒は］彼を呼び言った。「お前は礼拝への呼びかけを聞くことが出来るのか？」彼は言った。「はい。」すると使徒は言った。「ならばそれに答えよ。」[15]

このハディースのイスナードは、アブー・フライラ (603–681) という人物に行きつく。彼はムハンマドの年若い友人で、ムハンマド没時、30歳であった。彼は5000以上ものハディースを伝えたとされており、『ハディース』の中にはこのアブー・フライラの名前が頻出する。つまり、その分信頼性が高い情報源と見なされているということである。このハディースは、盲目の男がムハンマドを訪れ、誰も自分をモスクへと連れて行ってくれないから、自宅で礼拝をおこなっても良いかと尋ねるところから始まる。通常ムスリムは１日に５回の礼拝をおこなうが、特定の場所で礼拝しなければならないといった規則はとくに存在しない。しかし、金曜日だけはモスクに集まり、集団で礼拝しなければならないのである。つまり、ここで盲目の男性がムハンマドに尋ねているのは金曜礼拝のことであるのが分かる。金曜礼拝については、『コーラン』第62章「合同礼拝の章」で規定されている。

> あぁ信仰する者たちよ、合同礼拝の日（金曜日）[16]に呼びかけられたなら、神を念

じることに急ぎ、商売から離れるように。もしあなたたちが分かっているのなら、そうするのがあなたたちに最も良い。(『コーラン』62: 9)

この『コーラン』の章句では金曜日に礼拝に行くようにということだけが述べられており、なんらかの事情によってそこに行くことの出来ない場合はどうすればいいか触れられていない。『ハディース』が重要になってくるのはこのような場合である。当時の人も『コーラン』のこの部分を読んで――先述の通り、この時代『コーラン』はまだ文字化されていないため、正確には「聞いて」――疑問に思ったのだろう。そしてこの盲目の男性はムハンマドを訪れて聞いたのである。質問を受けムハンマドは、彼が自宅で礼拝をおこなう許可を与えた。つまりこのハディースによれば、身体的障害などによって礼拝に向かうことが出来ない場合は、必ずしも合同礼拝に出席する必要はないのである。

これは『コーラン』48章「勝利の章」における聖戦への参加にかんする啓示と同様の意図の発言だと考えられる。つまり共同体の規則としては、金曜日にはモスクに行って全員で礼拝しなければならない。しかしそのような規則も杓子定規に守ることを強制されるのではなく、状況に応じて柔軟に対応することが可能であったのだということが分かる。ただし、このハディースの最後の部分はやや趣が異なっている。最後にムハンマドはこの男性に向かって「礼拝への呼びかけは聞こえるのか？」と聞き、男性が「はい」と答えると、ムハンマドは「ならばそれに答えるように」と告げる。これはなにを意味しているのであろうか。この男性は盲目であるが、このようなムハンマドとの会話が伝えられているということは、耳に障害は持っていなかったということであろう。そこでムハンマドは、礼拝への呼びかけを聞くことが出来るのかと聞いたのである。イスラームが主流の地域では、いまでも「アザーン」と呼ばれる一日五回の礼拝への呼びかけが街中に響いている。礼拝の時間になるとモスクのミナレットから、「神は偉大なり（アッラーフ・アクバル）」という声が響いてくるのである。そこでムハンマドは、この呼びかけが聞こえるのかと聞いたのである。この礼拝への呼びかけが聞こえるなら答えよというのは、モスクに行けという意味ではないだろう。これは、盲目であるということでモスクに行くということは免除されているが、耳は聞こえて日々の礼拝への呼びかけを聞くことは出来るのだから、その点はしっかり信徒としての勤めを果たすようにという意味であろう。つまりここでムハンマドが言っているのは、障害などさまざまな原因によって義務の遂行が困難である場合は強いてそれを行う必要はないが、それでも各人の出来る範囲の勤めは怠らないように、ということだと考えられる。完全に保護の対象と考えるのではなく、出来ないことはしなくても罪にはならない、但し出来ることにかんしてはし

っかりと行うように、という考え方であろう[17]。

これら『コーラン』と『ハディース』の二つを見て分かるのは、規則通りにならない事態にたいして、きわめて柔軟な対応をしているということである。イスラームはユダヤ教やキリスト教と同じ系統の宗教であるため、当然ながらきわめて規則を重視する[18]。イスラームもこの系譜を継いでいるため、当然律法的なものを持っており、『コーラン』における啓示がそれに当たる。但し、イスラームが独特なのは、この啓示のなかにすでに例外規定を含んでいる場合が多いということである。「～をしなければならない」という規則があると、大抵そのあとに「ただし～の場合はその限りではない」と例外規定が設けられている。礼拝の規定のように、そのようなものを欠く場合もあるが、大抵『ハディース』がそれを補っている。これはムハンマドが商人であったためであり、『コーラン』で示されている規則には当時のメッカやメディナの商人たちの商取引の言葉や概念がかなり反映されているのだとも言われている。最初期にムハンマドが神からの啓示を伝えた対象はこのメッカやメディナの都市民たちであり、聞く方としても自分たちになじみのある概念で伝えられた方が受け入れやすいのは当然である。そのため、イスラームの規則は一見厳しそうに見えるが、ユダヤ教などの戒律にくらべると相当臨機応変の柔軟性を有しているのである[19]。

3．『千夜一夜物語』における障害の表現

最後に、宗教的なものとは程遠い例を取り上げることにしよう。それは露悪的で、悪趣味で、不道徳な物語である。これらの物語を集めたものは、一般的に『千夜一夜物語』として知られている[20]。この物語は大きな枠物語と、その中で語られる物語群という構造を持っている。物語全体の枠は、有名なシェヘラザード姫とシャフリヤール王の物語である。様々な事件により女性不信に陥ったシャフリヤール王が国の若い娘を次々と妃にし、一晩過ごしたら死刑にするということを繰り返し、国中から若い娘が逃げ出してしまう。そのような惨状を見かねて、大臣の娘であるシェヘラザードが自ら王の妃に志願する。彼女は寝る前に毎晩一つの物語を語っていくが、ちょうどいいところで朝が来てしまい、王様は話の続きが気になってしまい、結局千一夜過ごしてしまうという物語である。最後の話を語り終えたところでシェヘラザードは「もうなにも語る話はありません、さあ私を処刑してください」と言うが、王はシェヘラザードと過ごした三年近くの日々のあいだに、彼女を愛するようになっており、また二人のあいだに出来た子供たちが彼らのもとにやってくる様を見て改心し、それ以降は名君となった、というところで大団円となる。

また『千夜一夜物語』はアラビア語で書かれており、アラビアン・ナイトとい

う別名もあるため、アラブの物語だと思われるかもしれないが、そう単純に断言することは出来ない。そもそもシェヘラザードやシャフリヤールという人名がアラビア語ではなくペルシア語なのである[21]。つまり『千夜一夜物語』には、アラブ以外、とりわけペルシアの影響がきわめて強く現れているのである。これはある意味当然とも言えることであり、ムハンマド没後、第２代目カリフ・ウマルのときにアラブはササン朝ペルシアを滅亡させ、それ以降ペルシアはアラブ・イスラームの支配下にはいることになるが、宗教的、政治的にはアラブ人が支配者であったとはいえ、ペルシアには当時すでに千年以上続く歴史と伝統が存在していたのである。そのためアラブ人たちはペルシアの文化、そして同時に東ローマ帝国の文化を熱心に学んでいくことになる[22]。また最初のイスラーム帝国であるウマイヤ朝はアラブ人中心主義であったが、次にイスラーム地域を支配したアッバース朝はペルシア系の有力者たちの援助によって建てられた帝国であり、このアッバース朝においてイスラーム帝国は国際的文明へと成長していくことになる。よって、『千夜一夜物語』がきわめて強いペルシア文化の影響のもとに作られているというのはとくに驚くべきことではないのである。ただし含まれている物語がすべてペルシア起源のものかというとそうではなく、10世紀以降のカイロあたりを舞台としたような、当時のアラブ人にとっての現代劇もずいぶん含まれている。そのため『千夜一夜物語』には、幻想的で神秘的な物語から、現実的な世界を舞台とした面白おかしい話や人情話までと幅広い物語が収録されることになったのである。

そういった多彩な物語のなかで、本稿でとくに取り上げるのは、そのなかでもおそらく現代劇――無論当時のアラブ人にとって――に分類されると思われる物語である。この物語は厳密に言えば障害にかんする物語とは言えないかもしれず、また『コーラン』や『ハディース』における取り上げられ方とは、はっきりと異なっている。この物語には精神性や社会性など一切含まれていない。共同体の維持にかんする考慮や、倫理的な教訓も皆無である。それは『千夜一夜物語』の最初の方に収録されている一連の物語群、題して「せむし男の物語」である[23]。この話は一連の枠物語集になっており、大きな物語としては、このせむしの男をめぐる騒動がある。むかしシナの国にいた仕立屋がせむしの男を夕飯に招く。しかし仕立屋の妻がせむしの男に無理やり魚を食べさせたところ、せむしの男は喉に魚を詰まらせて死んでしまう。仕立屋の夫婦は相談して、ユダヤ人の医者のところにせむしの男の死体を運んでゆく。ユダヤ人の医者はこの死体に躓いてしまい、自分が殺してしまったと勘違いしてしまう。恐ろしくなった医者は、料理人の家の台所の壁に死体を立てかけておく。料理人は泥棒だと思って死体を殴り、自分が殺してしまったと勘違いしてしまう。そこで市場の壁に死体を立てかけて

おいたところ、キリスト教徒の仲買人が通りかかり、これを強盗だと思って殴りかかる。仲買人は自分が殺してしまったと勘違いし、捕まって死刑の判決を言い渡される。すると料理人、医者、仕立屋たちが次々と現れて、実は自分が殺したのだと告白する。混乱した王様は、仲買人、料理人、医者、仕立屋それぞれに面白い話をするように命じる。そのようにして、物語の中でさらに物語が語られるという、枠物語の入れ子構造になっているのがこの一連の「せむしの男の物語」なのであるが、注目すべきなのは、そのなかで語られるモチーフがすべて身体の欠損にかんするものだということである。しかもそれは生まれつきの障害といった類のものではなく、なんらかの事件に巻き込まれてというもので、物語は大抵「なぜ自分はこのような体になったのか」という因縁話を語るというスタイルになっている。途中で登場する床屋による兄弟の身の上話も加えると、まるで身体欠損にかんする類例を列挙し尽くそうという執念があるようにすら思われてしまう。ここで語られている物語はあけっぴろげで残酷で、それでいて妙に乾いており、楽観的ですらある。ここで展開されている世界は、野蛮で粗暴なものであるが、当時の民衆たちが生きていた世界を生き生きと描写している。

・せむし男の物語
せむし男をめぐる騒動、仕立屋、医者、料理人、仲買人たちの勘違い。王による裁判。
・仲買人の物語
ある仲買人が美しい若者と出会い、一年後に再会したときには**右手を失っていた**という話。
・右手を失った若者が自らの身に起こったことを説明する。
・料理人の話
コーランの読誦会のあとの宴会で、**両手足の親指がない**男と出会った話。
・両手足の親指がない男が自らの身に起こったことを説明する。
・医者の話
医者が昔見た患者で、**右手が斬り落とされた**若者がいたという話。
・右手を斬り落とされた若者が自らの身に起こったことを説明する。
・仕立屋の話
せむし男の事件が起こった朝、仕立屋が組合に出ていると**右足の悪い**若者がやってくるが、床屋を見ると立ち去ろうとしたという話。
・右足の悪い若者が、自らの身に起こったことと、それにかんする床屋との因縁を説明する。
・床屋が自らの弁明のために、自分がいかに「沈黙家」であるか、いかに自分の

６人の兄と違うかの説明をおこなう。
・床屋の第一の兄が**片足を不自由**にした話。
・床屋の第二の兄の**背骨が曲がり足が不自由になった**話。
・床屋の第三の**盲目**の兄の身の上話。
・床屋の第四の兄が**片目をえぐられた**話。
・床屋の第五の兄が**両耳を切り落とされた**話。
・床屋の第六の兄が**唇と陰部を切り落とされた**話。
すべての話を聞いた王が床屋を呼び出すと、ひょんなことから事件はすべて解決する。

注

（１）イスラームはユダヤ教、キリスト教と同じ聖典を共有する「啓典の宗教」とされるが、この三つのなかでは成立がもっとも遅く、イスラーム暦の元年は622年である。これは預言者ムハンマドがメッカからメディナへと、「聖遷（ヒジュラ）」したことが由来であり、ヒジュラ暦とも呼ばれる。初期イスラームはアラビア半島の部族主義との戦いが多く、この聖遷も、メッカにある反イスラーム勢力から逃れるためであった。

（２）ムハンマドが最初に啓示を受けたのは610年ころ、およそ彼が40歳の頃であった。父親を早くに亡くし、（叔父が庇護者であったとはいえ）後ろ盾のなかったムハンマドは、ハディージャという年上の裕福な商人の寡婦と結婚。彼女のもとで商才を顕し、40歳までにはムハンマド自身も裕福な商人となっていた。しかし40歳になり悩みを抱いたムハンマドがヒラー山に籠っていたところ、天使ガブリエル（アラビア語ではジブリール）を通した啓示を受け、以降632年に亡くなるまで、20年以上にわたって神の啓示を受け続けた。622年の聖遷以前の啓示をメッカ期、それ以降をメディナ期と分類し、メッカ期の啓示は比較的短くて緊張感に富んだ黙示的なもの、メディナ期の啓示は比較的長くて社会の規範にかんするようなものが多いという傾向がある。

（３）『コーラン』、『ハディース』における障害の表現を紹介したものとしては、Miles の論文 (Miles 2002) が存在する。

（４）日本語で読むのであれば、岩波文庫版がもっとも入手に簡便であろう。井筒俊彦訳 (1957–58). 『コーラン』（上、中、下）東京: 岩波書店。岩波版では文庫本三冊であるが、一般的にアラビア語の原典では一冊に収まるのが普通である。またコーランを解説した本は数多いが、一冊挙げるとすれば井筒俊彦『コーランを読む』がイスラームにおける最初期の啓示を詳細に分析しており、きわめて示唆的である。長らく絶版であったが、岩波現代文庫に収録されたので、入手も容易になった。井筒俊彦 (1983; 2013). 『コーランを読む』東京: 岩波書店。

（５）書物としての『コーラン』の制定にかんしては、デロッシュ (2009) を参照。

（6）有名なペルシアの詩人ハーフェズは、このハーフィズをペルシア語読みしたものである。ハーフィズそのものはそれほど珍しいものでなく、ウラマー（イスラームの神学者）は皆ハーフィズであることが求められる。

（7）部族社会であり、血族による庇護が重要であったアラブ社会において、両親にあたる庇護者を欠くということは、きわめて不利なことであった。ムハンマドも父親を亡くしており、叔父であるアブー・ターリブの庇護下にあったが、このメッカの共同体に影響力を持っていた叔父が亡くなったことが、ムハンマドを聖遷（メッカからメディナへの逃走）へと走らせた原因のひとつでもある。

（8）イスラームは貧しい者たちへの喜捨を、ムスリムのおこなうべき五行のひとつに定めている。そのため、喜捨は単に慈悲心の発露として推奨されるものでなく、義務であり、貧しい者たちにとってそれは権利とされる、Bazna & Hatab (2005): 22.

（9）日本においては単にイスラームの断食を指す言葉としてラマダーン、またはラマダンなどとされているが（アラビア語では ramaḍān）、これは正確には断食月の月名であり、断食そのものはサウム（ṣawm）という。

（10）Ibid., 17.

（11）昨今のイスラームは、女性の権利にたいする後進性などが指摘されるが、『コーラン』は基本的に神の前における全人類の平等を謳っており、胎児や知的障害者にたいする権利も認められている。Morad et al. (2001): 65–71.

（12）『ハディース』、アラビア語で ḥadīth は、そもそも「話」や「物語」という意味である。つまり、『ハディース』に収録されているそれぞれの話もハディースと呼ばれるのであり、書物としての『ハディース』はその集成ということである。本稿において、『ハディース』は書名を、ハディースはそこに含まれる話そのものを指している。また、『ハディース』には『コーラン』と違っていくつかの版が存在し、そのなかでも「ブハーリー版（ṣaḥīḥ al-bukhārī）」、「ムスリム版（ṣaḥīḥ al-muslim）」の二つはとくに権威が高いとされる。「ブハーリー版」には日本語訳が存在する。牧野信也訳 (2001). 『ハディース　イスラーム伝承集成』（全５巻）東京: 中央公論社。しかし現在絶版となっており、入手は困難である。

（13）法源の重要性は、第一が『コーラン』、第二が慣習（スンナ）（この根拠が『ハディース』）、第三が合意（イジュマー）、第四が類推（キヤース）であり、法源の順位が下がるほど重要性は低くなっていく。

（14）英訳版などでは、この部分は単純に「Abu Huraira reported」などとなっているが、アラビア語のイスナードを正確に訳すと、「クタイバ・イブン・サイードとイスハーク・イブン・イブラーヒームとスワイド・イブン・サイードとヤアクーブ・ダウラキーは我らに伝えている。彼らは皆マルワーン・ファザーリーから［聞いたの］である。クタイバが言うところによると、ファザーリーが我らに伝えているのはウバイドゥッラー・イブン・アルアサンムから［聞いたの］であり、［ウバイドゥッラーが］言うところによると、ヤジード・イブン・アルアサンムが我らに伝えているのは、アブー・フライラから［聞いたの］であり、［アブー・フライラが］言うところによると…（以下本文）」となっている。

（15）ムスリム版『ハディース』英語版番号：４巻1374、アラビア語版番号：６巻1518。

（16）合同礼拝の日はアラビア語で yawm al-jum‘ah。アラビア語の語根 j-m-‘ は「集まる」ことにかんする意味を持つので、まさに「集合の日」という意味である。また、これはアラビア語において「金曜日」の意味でもある。アラビア語の一週間は日曜日から始まり、日曜日が「第一の日」、月曜日が「第二の日」、土曜日が「第七の日」と機械的に名付けられているが、金曜日だけ「第六の日」ではなく「集合の日」という意味なのである。

（17）当時すでに老齢で足が悪かったにもかかわらず、三人の息子たちと共にウフドの戦いに参加したアムル・イブン・アルジャムフの話も報告されている。彼らは戦闘中も預言者ムハンマドのそばに付き従い、全員戦死してしまう。障害のために義務が免除されていたとしても、敢えてそれをおこなうことは当然ながら称賛の対象とされていたであろう。Bazna & Hatab(2005): 17.

（18）旧約聖書の聖典のひとつ、「レビ記」などには、きわめて詳細な規則が述べられている。たとえばレビ記11章では、蹄が分かれていて、反芻する動物は食べることが出来るが、ラクダ、岩狸、野兎は反芻するが蹄が分かれていないから食べてはならず、豚は蹄が分かれているが反芻しないから食べてはいけないなど、それぞれの動物にたいして指示されている。これが水棲生物、鳥などさまざまな動物にたいして述べられ、レビ記11章はすべてが食物規定に割かれている。また、レビ記の記述は動物にたいする禁忌のみでなく、それらの動物に触れた者も「穢れる」とする点に注目すべきである。またイエスはこういった律法の杓子定規な点を批判し、「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない」（「マルコ２：27」）と述べるが、「わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思ってはならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである」（「マタイ５：17」）とも言っており、律法を否定しているわけではない。

（19）それではなぜ現在のイスラームが戒律主義に陥り、原理主義者たちの声が大きくなっているのかというのは、考えるべき問題である。しかしこれは本稿で取り扱うにはあまりにも大きな問題であるので、ここではそういった問題を提示するにとどめておく。

（20）『千夜一夜物語』にはさまざまな版が存在する。日本でもっとも簡単に手に入るのは、岩波文庫版 (豊島与志雄ほか訳 1988) とちくま文庫版（大場正史訳2003–2004) であろう。岩波版はフランス語訳のマルドリュス版、ちくま版は英訳のバートン版を底本にしており、アラビア語原典からの翻訳ではない。アラビア語原典からの翻訳であれば、東洋文庫版（題名は『アラビアン・ナイト』）がカルカッタ第二版を底本にしている。『千夜一夜物語』の西洋言語への最初の翻訳は Antoine Galland によるもの (Galland [trad.] 2004) であり、1704年から1717年にかけて出版された。英訳も数多く存在しているが、アラブ学者としても名高い William Lane による翻訳 (Lane 1865, 2006) が1838年から1840年にかけて、Richard Burton による翻訳 (Burton [trad.] 1894) が1885年から1888年にかけて出版されている。また1984年には Muhsin Mahdi によって、最古のアラビア語写本を基にしたとするアラビア語の校訂版 (Mahdi [ed.] 1984) が出版されている。『千夜一夜物語』は別名アラビアン・ナイトとしても知られているが、アラビア語の原題は「千の夜とひとつの夜（alif laylah wa-laylah）」

なので、『千夜一夜物語』の方が忠実な訳である。Galland の仏訳では *Les Mille et une Nuit*、英訳版でも Lane 版は *Thousand and One Night*、Burton 版も *The Book of the Thousand Nights and a Night* である。但し、Lane 版は副題として、”Commonly Called, in England, *The Arabian Nights' Entertainments*” という文章が添えられているため、英語圏ではアラビアン・ナイトという呼び方が一般的であったようである（アラビアの夜伽話といったほどの意味か）。

（21）シェヘラザードは「街で生きる者」、シャフリヤールは「街を持つ者」という意味である。両者共に、ペルシア語で「街」を意味する shahr という言葉が入っている。またシェヘラザードと一緒についてきた妹（一説には召使とも）のドゥンヤーザードは「世界で生きる者」という意味である。

（22）アッバース朝のカリフ、マアムーンが建設した「智慧の館（bayt al-ḥikmah）」はギリシアの科学や哲学を学ぶための一大翻訳センターとして有名である。しかし、この智慧の家は、ギリシアの知識を学ぶための機関ではなく、ペルシアの知識を学ぶための場所であったとする研究も存在する。Gutas, D. 1998, 1999: 53–60.

（23）Lane 版では ’The Story of the Hunchback’、Burton 版では ’The Hunchback's Tale’ となっている。Lane (trans.) 1865, 2006: 291–389. Burton (trans.) 1894: 234–324. また Mahdi 版では「シナの王の友人であるせむし男の物語（qissah al-aḥdab ṣāḥib malik al-ṣīn）」となっている。Mahdi (ed.) 1984: 280–380.

文献

■欧語文献

Bazna, M. S., & Hatab, T. H. (2005). Disability in the Qur'an: The Islamic Alternative to Defining, Viewing, and Relating to Disability. *Journal of Religion, Disability & Health*, Vol. 9(1), 13–23.

Burton, R. (trans.) (1894). *The Book of the Thousand Nights and a Night*, vol. 1, London: H. S. Nichols & Co.

Galland, A. (trad.) (2004). Les Milles et une Nuit, III Tomes, Paris: GF Flammarion.

Gutas, D. (1998, 1999). *Greek Thought, Arabic Culture*. New York: Routledge.

Lane, W. (trans.) (1865, 2006). *The Tousand and One Nights, Commonly Called, in England, The Arabian Nights' Entertainments*, vol. 1. London: Elibron Classics.

Mahdi, M. (ed.) (1984). *Kitāb alif laylah wa-laylah*. Leiden: Brill.

Miles, M. (2002). Some Historical Texts on Disability in the Classical Muslim World. *Journal of Religion, Disablility & Health*, Vol. 6(2/3), 77–88.

Morad, M., Nasri, Y., & Merrick, J. (2001). Islam and the Person with Intellectual Disability. *Journal of Religion, Disability & Health*, Vol. 5(2/3), 65–71.

■邦語文献（50音順）

井筒俊彦訳 (1957–58).『コーラン』（上、中、下）東京: 岩波書店.

井筒俊彦 (1983, 2013).『コーランを読む』東京: 岩波書店.

大場正史訳 (2003–2004).『バートン版 千夜一夜物語』（全11巻）東京: 筑摩書房.
デロッシュ、フランソワ (2009).『コーラン―構造・教義・伝承』（小村優太訳）東京: 白水社.
豊島与志雄、渡辺一夫、佐藤正彰、岡部正孝訳 (1988).『完訳 千夜一夜物語』（全13巻）東京: 岩波書店.
牧野信也訳 (2001).『ハディース：イスラーム伝承集成』（全５巻）東京: 中央公論社.
前嶋信次、池田修訳 (1966–1992).『アラビアン・ナイト』（全18巻、別冊）東京: 平凡社.

Abstract

Yuta Komura, “Expressions of Disability in the Context of Islam”. In Ishihara, K. and Inahara, M. (eds.), *UTCP Uehiro Booklet*, No.2. *Philosophy of Disability & Coexistence: Body, Narrative, and Community*, 2013, pp. 73– 87.

This article deals with the expressions of disability which were expressed in the context of Islam. And in this article, we especially took three books as our subjects; *al-Qur’ān*, *al-Ḥadīth*, and *Kitāb alif laylah wa-laylah*. The last one is also called as *The Arabian Nights*. Of *sūrah* (chapter) of the *Qur’ān*, we analyzed two *sūrah*, the chapter of the Victory (*sūrah al-fatḥ*),and the chapter of the Light (*sūrah al-nūr*). In these chapters, they treat those who have disability with their physical powers, and regard them as normal members in their community as possible. This means that they are exempt from their responsibilities, especially going to wars, and that they should not be discriminated whatsoever. On the other hand, the *Ḥadīth*, which is sayings of the prophet Muḥammad, treats more particular problems than the *Qur’ān* does. Because of the *Ḥadīth* being articulated directly from the prophet, it contains more actual cases. Here we examined the case with a blind man who has a difficulty with going to the mosque, which was reported by Abū Hurayrah. And finally, we argued the *Arabian Nights*. Although the former two were religious text, this one is a pure literature work, more than that, it is notorious with its eroticism, hedonism, and bad taste. Of these tales, we especially looked into the tale of the Hunchback, which has a collection of disabilities in that. The tale has a nesting structure, and many speakers represent their tales in turns. But in every tales, there appears at least one person with a (in some case, some) disabilities. It has some cruelty, it is true, but these tales surely represent *la vie quotidienne* of the medieval peoples lively.